

警察政策学会資料 第131号

令和5（2023）年8月

事例に学ぶ情報リテラシー

警察政策学会

管理運用研究部会

まえがき

本号は、令和5年8月2日の管理運用研究部会定例会での、小木曾健氏講演「正しく怖がるインターネット～事例に学ぶ情報リテラシー」とその後の質疑応答の内容をまとめたものである。

小木曾氏は当部会員河邊有二氏による「講師紹介」にあるように、ネットリテラシー向上のため、全国を巡りながら積極的に講演活動を続け、講演数は2000回を超え、受講者は40万人を超えている。

ネットの炎上事例を数多く分析して得た「ネットで失敗しない方法は何か」の答えは、日常でやっていいことはネットで何やっても失敗しないし炎上しないが、逆に日常でやっていけないことはネットでもやってはならない。具体的にいうと、「ネットはすべて玄関の外側」だから、自宅の玄関ドアの外側に貼れるものはどんなものでもネットに書いて大丈夫だが、迷ったらやめるということにつきるといふ。

特に印象に残ったのは、「インターネットが一般化したのは1995年以降だからインターネットの世界では年長者でも25歳位。そういう「若者」で構成されているのがインターネットの世界。車のことをよくわからずに乗り回しているようにネットをよくわからずに使っている。だから、大人が対象でも、若者が対象でも基本的に同じことをいうようにしている」ということ。地道な交通安全教育が現在の交通死亡事故の大幅減少につながったように、「ネットで失敗しない方法」という基本中の基本を世の中に伝えていきたいという。

インターネットに限らず、コンピュータの世界の最新情報を駆使した講演の本記録は一読に値するとおもわれる。

令和5年8月

松尾 庄一

正しく怖がるインターネット～事例に学ぶ情報リテラシー

小木 曾 健

講師の紹介 河邊有二	1
------------------	---

講演

東日本大震災で起きていたこと	2
アイスクース炎上	3
なぜ特定されるのか	3
「友だち限定」は幻想	5
炎上したらどうなるのか	5
ネットで絶対に失敗しない方法	6

補論

投稿とはコントロールを諦めること	8
騙されないために	8
ネットリテラシー教育の在り方	9
「忘れられる権利」について	9
メタバースでの問題	9
メールの将来性	10
パスワードについて	10
個人の日記を外に出す理由	10
誹謗中傷への対応の仕方	11

正しく怖がるインターネット～事例に学ぶ情報リテラシー

小木曾 健 氏

講師の紹介

河邊有二

小木曾健先生は、1997年に青山学院大学経済学部を卒業後、複数のITベンチャー勤務を経て、現在グリー株式会社においてシニアマネージャーとして勤務している。また、我が国における情報社会論やインターネットに関する社会科学・思想関連の研究拠点の一つである、国際大学のGLOCOM（グローバル・コミュニケーション・センター）の客員研究員を勤めている。

先生は、ネットリテラシー向上のため、小中高生から公務員を含む社会人まで幅広い対象に向け、全国を巡りながら積極的に講演活動が続けられている。講演数は2000回を超え、対象者は40万人を超えているとのこと。また、著書も手元の資料にある通り多数ある。

警察との関連においても、福岡県警等の警察学校や警察大学校初任幹部科での講義をおこなっているほか、ご出身県である埼玉県警のサイバー犯罪対策技術顧問に就任している。また、2022年11月に開催された警察庁犯罪被害者週間啓発事業中央イベントでは、パネリストとして出席いただいた。

そのほか、海上保安庁、総務省、文科省等の国の機関でも講演を行っている。

講演

紹介にあったように、ネットリテラシーの向上に向けて全国を講演している。

6, 7年前から福岡県の警察学校の学生には毎年2回聞いてもらっている。警察学校に入ると、スマホは取り上げられるが福岡県警察では私の講演を聞くことがスマホを返す条件、だから、私の都合が悪くて遅くなると早くきてくれといわれる。

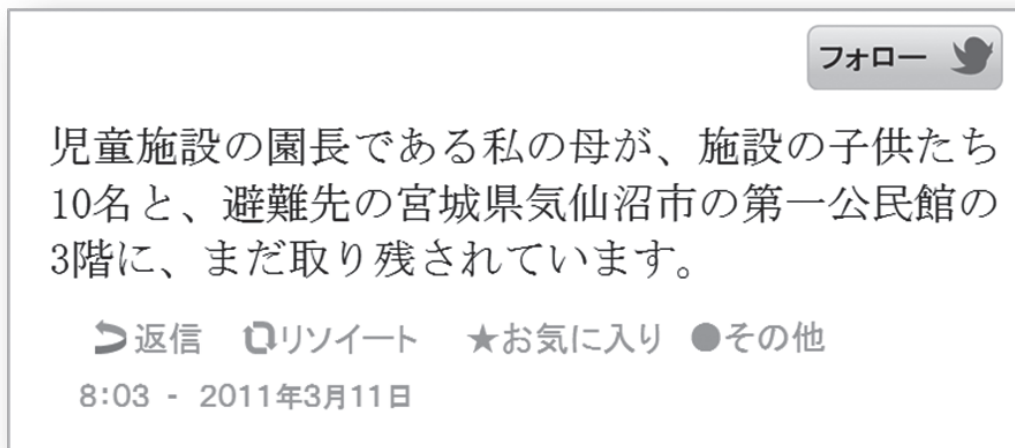
私の講演は小学5年以上を対象にしている。なぜかというとなネットリテラシーは子どもだからこれくらいというわけにはいかないから。つまり、車の運転を教えるときと同じように年齢を問わず内容は一緒でないといけない。

ネットもスマホも、車と同じ道具、使い方について同じ内容を聞き、同じ納得をしてもらうということを踏まえ、本日、「ネットで絶対失敗しない方法」を講演する。

まず、講演では、渋谷のスクランブル交差点でプライベートな情報を書いたボードを掲げる写真（省略）を紹介して、「こんなことをしますか」と聞く、そんなことはしないというのが普通の人の回答である。ところが、ネットだとこんな大胆なことを簡単にしてしまう。それはなぜか、そうしないためにはどうしたらよいかこれから述べていく。

東日本大震災で起きていたこと

その前に、インターネット、特に SNS のすばらしさについて実例を紹介する。



このツイートは、3.11 東日本大震災の津波で避難先に取り残された自分の母親を助けてほしいというもの。

この息子は、直前に母親から次のような携帯メールを受け取っていた。

助けて！！もう火が近くまで来てる
子どもたちを連れて建物の3階まで上がったんだけど2階に水が入り始めた。
どうやら私たち誰にも気づかれてないみたい
もうダメかな。。。でもまだ頑張るからね！！

こんなメールをもらった息子は誰でも心配する。でもこのツイートの発信時間は3月11日の午前8時3分、あれおかしいと思った人は正解、実は、これはロンドン時間、息子は遠く離れたイギリスに住んでいた。母親からメールを受け取った息子は思わず、助けをツイッターで求めた。

これを読んだ多く的人是心配したけど、何もすることはできない。ただ、一人だけ違った、東京都副知事（当時）だった猪瀬直樹氏は、これを読んだ瞬間、東京都消防庁に対して、「責任は俺がとるから大型ヘリを現地に飛ばしてくれ」と命令した。東京消防庁のヘリは、結果的に母親と園児以外にその避難施設に取り残された400名以上を2日かかりで救出した。

その時の新聞記事がこれ。

平成23年（2011年）3月17日 金曜日



東日本大震災発生直後の三月十二日未明、宮城県気仙沼市で一時孤立していた住民およそ446名に対し、東京消防庁のヘリが出勤し、2日かかりで全員が救出されていた。
このほどヘリで救出された人たちが十八日、東京都庁を訪れ、猪瀬直樹副知事に謝意を伝えた。
「今でもヘリコプターを見ると胸がいつぱいになる」。救出されたうちの一人、宮城県気仙沼市内の障害者向け福祉施設マザーズホームの園長・内海直子さんはこう語る。震災時、内海さんの施設では児童らが曇毛した後だったが、近隣の市立一景島保育園からは、所長が〇〇と歳児が近くの公民館に逃げ込んでいた。

この事例にはいくつもの幸運が重なっている。

まず、近くの基地局が水没しなかったため、母親のガラ携が繋がっており、メールを送りこめた。

次に、アメリカで起きたこと。ツイッターのエンジニアが日本で大地震が起きたと聞き、直ちに倉庫に走って、来週使う予定の新品のサーバの基盤を集めて、日本向けのサーバに詰め込んだ。このエンジニアは、もしかしてツイッターで助けを求める人がいるかもしれないと思い、当時はよく落ちていたツイッターが落ちないようにとものすごい勢いでサーバを増強したため、このときツイッターは落ちなかった。

三番目は、たまたま、猪瀬氏がこのツイートを目にしたこと。

インターネットが本気を出すと人と人とを結びつけて400人以上の命を救うことができる。

アイスケース炎上

ただし、いい話ばかりではない。よくない話もたくさんあるが、そのなかでもよくないのはネットの炎上、ネットにあげられ袋叩きにあうのが炎上。

10年前、高知市内のコンビニローソンのアルバイトが、店のアイス売り場のクーラーボックスに寝転がる姿を自撮りして、SNSに投稿した。これが、TVのワイドショーで「ネット炎上」ということばが普通に使われ出した最初の出来事になった。

最初フェイスブックにのり、ツイッターに流れ出た。1か月後には当時の2ちゃんねるに掲載された。今の炎上はツイッターでおさまるが、当時は2ちゃんねるの方がユーザーが多く、2ちゃんねるが炎上の舞台だった。

書き込みは「どこの店か知らんが、ローソン利用するのをやめよう」「こんなことをやられたら店はたまらんだろう」等の程度で、この男が何ものかは特定されていなかった。しかし、その日のうちに、この男はこの店のオーナーの息子で2日後新聞に載る。2ちゃんねるで炎上が始まるやローソンのコールセンターに数百件以上のクレーム電話が殺到した。

ローソンの対応は伝説になるほど早かった。炎上が始まるや、飛行機で東京の本部から高知県へ社員約10名、レンタカーに分乗させて営業中の店に送り込んだ。彼らは着いたとたん、駐車場をカラーコーンでふさぎ、お客が入らないようにし、店内の客には出て行ってもらい、中の商品は全部運びだした。店はブルーシートでおおい、しまいにはクレーンまで持ってきて看板を取り外した。

オーナーにしてみれば、10年近く苦勞してきた店が自分の息子のたった数枚の写真で全部消えた。

なぜ特定されるのか

こんな大騒ぎになったのに真似する連中が大勢出てくる。しかし、びっくりするくらい短い時

間（3、4時間、早いと数十分）でどこの誰だかばれてしまう。

その第1の理由。炎上すると最初の段階でも100万人以上の人が見る、そうすると、「こいつ知ってる」という人間が少なくともひとりが出てくる。そう言い切れる理論上の根拠は「6次の隔たり理論」six degrees of separation。つまり、間に多くても5人入れれば世界中の人間とつながるといふもの。これは、郵便だけの時代の理論で、今は人と人がネットでつながっているの、5人もいらずにつながるようになった。

第2の理由。ツイッターへの何気ないつぶやき、タイムラインへの投稿、ただの風景写真等の個人情報ではない些細な情報から100万人がつないで分析してひとつの意味ある情報に変える。

このスライドはネットから引き出した「東大大学院女子日記」。特定されようがないように少し変えているが、ほぼ投稿通り。25、6歳くらいの高学歴の女性が、注意しながら投稿したにもかかわらず、氏名はもちろん、住んでいるところまで特定できた（経緯省略）。

警察の捜査とは真逆なのは、たぶんこうだろうということ積み重ねることで人物を特定し、最後は令状なしでいきなり押しかけることができること。間違えてもだれも責任をとらないこと。訴えられれば負ける雑な話。こんな雑なことが行われて、結構当たるのがネットの社会。



いえることは、個人情報を載せないから大丈夫というのは幻想。個人情報でない情報をネットに載せるときには載せる前の振り返り、この投稿で誰がどう思うのか、何をできるのか考えること、いわば、瞬発力でも、載せた後の後悔でもない「載せる前の想像力」が非常に重要だということ。

ネットに投稿することで、身元もばれる、身を危険にさらすことを知ることが重要。

生活パターン、所在地等を推測できる情報は、教えるより教えない方がまし。なぜならばそれを見て犯罪者が動き出すかも知れないから。「これから6日間海外旅行に行きます」という投稿が元で留守中空き巣の被害にあったこともある。インターネットは犯罪者の「宝石箱」だと知っ

てもらいたい。

ただ、こんなことをいうときりがない、表札だって、顔だって個人情報、どうやって気をつけられるのかという人もいる。答えは、ネットなら個人情報を載せなくても身元はばれる、ネットなら身元はばれなくても待ち伏せなどで身の危険を招くという事実を知ることであぶなかしいことはしなくなる。

「友だち限定」は幻想

こういう話をすると必ず「自分は大丈夫、拡散しない「友達限定」でやるから、あぶない動画を何回も送ったが、炎上したことない」という人が出てくる。これは間違い。スクリーンショットで簡単に拡散させることができるから。

正直、毎日の生活のほうが危ない、今日のような猛暑に出歩くのは危険。交通事故のリスクもまだまだ高い。だから、ネットの危険に神経をすり減らす必要はないではないかという人がいる。なるほど、ネットで危ない目にあう危険は優先順位をつけると下。しかし、ネットの危険を知らなかったからやる、あの子はネットの危険を知らないまま大人になったから東大の大学院に入りながらさっきのような日記をネットにあげる。神経をすり減らす話ではなく、「知ったから大丈夫」だということ。載せる前のちょっとした想像力が大事だということは覚えておいてほしい。

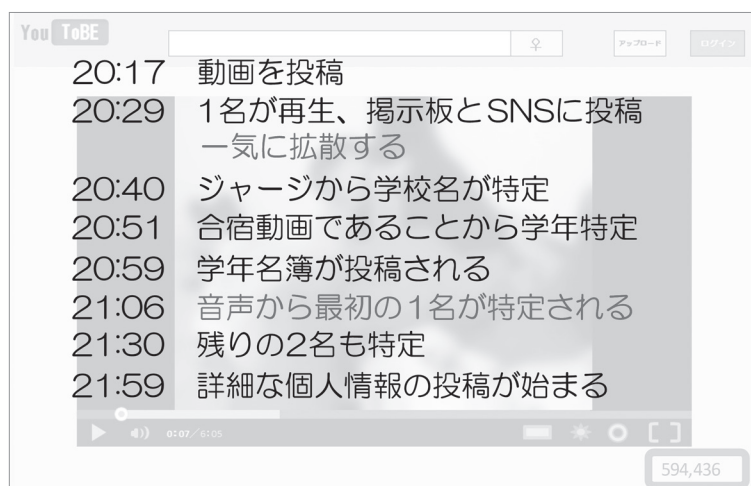
それに、炎上させるためには、自分以外にそれを見つけ、炎上を起こせるとひらめいた人がひとりいれば十分。ネットの炎上は、1,2,100万人と数える。投稿者が思い直して消去しても、見つけた人は、それを保存して騒ぎが起きやすい場所に置き返すだけで十分。炎上しなかったのは、たまたま、炎上させたいと思う人がいなかったから。

炎上したらどうなるのか

そして、炎上が始まると灰になるまで止まらない。

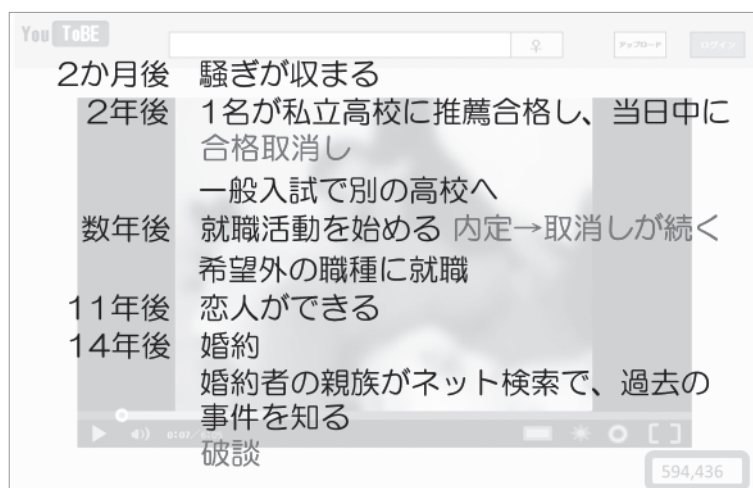
次に、その例を紹介する。

中1男子が夜11時に投稿した仲間をいじめている動画が10分後に60万回再生される炎上の話。



詳細な個人情報には、家の住所だけでなく、父親の名前、職業、母親の名前、勤め先、所属サークルまで入っている。こうして、集団による陰湿な嫌がらせが起こる。引っ越してもおさまらない。

ただし、普通の炎上は、賞味期限は2か月、頑張っても3か月、そうすると世の中の関心が消える、世の中は忘れてしまう。ところが、本件はそうではなかった。



2か月後に騒ぎが収まり、この子は心を入れ替え勉強してある私立高校に推薦を受ける。ところが、その高校に「〇〇は、あのいじめの犯人だ」との電話が入り、推薦が取り消される。また、就職活動をして内定を始めると同じような通報がいき、何回も取り消される。挙句の果てに、婚約者の親族がネット検索で、過去の事件を知るといふ悲劇が続いた。

この事件だけこんなに長引いたのは理由がある。冒頭の動画でグーをやられていた男の子がいじめに耐え切れず自殺したから。

念のためにいいたいのは、ネットといじめは別だということ。ネットいじめということばもきらい。なぜなら、ネットいじめはただのいじめ、ネットがこの世からなくなってもネットいじめは形を変えて続く。つまり、ネットはネット、いじめはいじめとして考えていかなければならない。

ネットで絶対に失敗しない方法

ネットは、世の中で生きていくための道具のひとつ。道具には絶対失敗しない使い方がある。

ネットで失敗しない方法のヒントはネットの未来の姿にある。

現在、メガネ型情報端末、特にARを組みこんだメガネ型情報端末が新しいメディア（道具）として登場している。「メガネ型情報端末が世の中に広まったら日常とインターネットの境目がつながり、日常とネットはつながってしまう」というようなことをいう人がいるが、手垢のついた表現。日常とネットが将来融合するという考えが間違い。既に、日常とインターネットの境目なんてない。これまでずっとつながり放し。ネットの中にいるのは私たち、そこでモノを書いて

いるのは私たち、それを面白いと思うのも私たち。ネットで起こることは日常と同じ。やることをやれば捕まってしまう。つまり、日常とネットとは同じもので、つながっている。それを分けて考えるからものごとがややこしくなる。

ネットで失敗ない方法は何かの答えは、日常とネットが同じであれば、日常でやっていいことはネットで何やっても失敗しないし炎上しない。逆に日常でやっていけないことはネットでやってもみっともないし、人生も終わってしまうかもしれないのでやらないということ。

私の講演を聞いてくれたひとは、ネットで絶対失敗しない方法についてこんな長たらしい文章は覚えてくれない。この長たらしい文章を忘れずに持ち帰ってもらえるようにする。

「ネットはすべて玄関の外側」

自宅の玄関ドアの外側に貼れるものはどんなものでもネットに書いて大丈夫。何もおきないことを保証する。

どういうことか。玄関の内側は、ネットにつながっていなかったパソコン。そこに何を書こうが、外には出ていかなかった。今は、インターネットで外につながり、SNSに書き込んだことが意図しない出方をする。栓は閉じているが、パイプはつながっているというのがインターネット。ネットにつながることは、外に出ていく可能性が必ずある。

そうすると、玄関の外側に貼れないことはSNSに書き込まないのがネットで失敗しない方法。

家の外で身元が一発でバレる場所は玄関ドアしかない。自分の玄関に貼れるものは何書いてもよいし、貼れないものは書かない方がいい、のではなく書いてはだめ。なぜならば、人生が終



わる可能性があるものに挑戦することになるから。

大げさだ、そんなことをいわれたらネットに何も書けなくなると文句をいうひともいる。しかし、大げさでも何でもない。事例を調べると、炎上したものはすべて玄関に貼れないもの、逆に、貼れる内容で炎上した事例はなかった。

そもそも、ネットを過大評価している、ネットに自由なんかない。あってもせいぜい玄関ドア程度。法律上やってはいけないと書かれていないが、実質的にはネットは玄関ドアぎりぎり、一歩でも踏み出したら、ダメ。なぜならばこれは大げさでもなんでもなく崖っぷちだから。

子どもたちにとって玄関に貼れるもの、貼れないものの基準はほぼ同じで、差がない。ところが大人はめんどくさくてそれぞれの仕事や立場、主張、人間関係等で玄関ドアがちょっとずつ違う。玄関に貼れるもの、貼れないものの基準を画一的に決めることは難しい。そこでたとえを変えて、知らない人が混じる立食パーティで話せるのは、その人の玄関ドアに貼れるものと考えてみたらどうか。そのような測定の仕方もある。

人間は迷ったときに失敗する。ネットも同じ。「面白いからネットに投稿したいけど、ビミョーだな」というときに失敗する。ビビョーの基準がばらばらだし、基準がばらばらな時に失敗する。その時の基準が「ネットはすべて玄関の外側」。これを子どもたちに知ってもらいたいし、それを大人から伝えてもらいたいというのが本日のゴール。早口にお付き合いいただき礼をいう。

補論

(質疑応答での講演者の回答をまとめた)

投稿とはコントロールを諦めること

世の中の人々が欲しがめるもの、流出しやすいものは、基本的に出ていくもの。人が見たがるものは出ていくと思った方がいい。アナログな方法だったり、違法な方法であったりしても出ていってしまう。だから、SNSでは、他人に見られないことを諦めても大丈夫なものしか送らないのが大事。

郵便物で全裸の写真を送るのは不安。それでも送りたいなら、他人に見られないことを諦めること。メール、SNSで送るものは、技術的・法的には守られているとしても、万が一の事故で流出しても大丈夫なものという線引きを自分でもっていて、かつ、可能性は必ずあるということを忘れないこと。

騙されないために

フェイクメールやフェイクニュースを見分けをつけるようにしないこと。見分けられると思う、ジャッジするようではどこかで失敗する。つまり、見分けられないという前提で、だまされるかもしれないという感覚でいると相当防ぐことができる。

ネットリテラシーの教育の在り方

基本的に子供が劣り、大人が秀でていること、逆に子どもが得意で、大人が追い付けないというのもネットの世界では間違い。なぜならば大人も子どももネットに関しては一年生。どういうことかという、ネットが一般化したのは1995年以降、だからネットの世界では年長者でも25歳位。そういう「若者」で構成されている国家がインターネットの世界。ゆえに問題が起きて当たり前。これからもっといろんな問題が起きていくかと思うが、今のところ、トラブルの数が多すぎる。ネットをよく分からずに使っている。車のことをよくわからずに乗り回しているようなもの。

昔は交通戦争と呼ばれた。それが世の中の機運が高まり、飲酒運転やシートベルトを装着しない事故の被害者はものすごく減った。ただし、ゼロにはならない。インターネットは、まだ、飲酒運転やシートベルトをしないで走り回るのが多すぎる時代にある。その時代の事故の件数、起き方が今のネット社会のトラブルの状況。

ネットとは何ぞやという基本中の基本を世の中に伝え、それが広まったところで、会合に出てこない親にリリースできるのかな、と思っている。今は、親に対して教育するのを諦めている。子どもは来てくれるので、「めっちゃ面白かったよ」と帰って話してもらうことで親に伝わればいいなと思っている。

「忘れられる権利」について

忘れる、忘れないというのは、人間の内面（脳）の問題で、「忘れられる権利」というのはネーミングが悪い。ネット上から削除、消される権利とでもいえばよい。ただ、ネット上から完全に削除するのは不可能。いちど書き込むと消せないことを知って使わねばいけない道具がインターネット。

メタバースでの問題

メタバースの問題は、誹謗中傷や著作権の問題を含め、基本的に現行法で対応できるものと思っている。

SNSが広まったときの反省として、SNSという新しいもの、対応等を含めてすべて新しいものと受け取られたことで、対応がすごく遠回りになったことがある。基本は現実世界と一緒だと思ふべきだった。SNSで起きていることと現実世界で起きていることは一緒という発想でいかなければ際限なく課題やトラブルを解決しようとするとうんざりしてしまう。

したがって、現実世界でやってはいけないことは、メタバースでやってはだめというところからスタートすべし。まずは現行法で対応して、できないものが出たら考えるという議論だけをやっておくといい。不必要に問題を大きくしてはいけない。

メールの将来性

ビジネスでは、テレビ電話、チャットが主流で、メールはそれが便利な時にだけ使うというのが主流になっている。メールは今後も確実にユーザー数は減っていくだろう。ただし、郵便がなくなっていないように、メールはこんな感じで残っていくだろう。

パスワードについて

本人認証に生体認証が使われてもパスワードは残る。生体認証もセンサーが反応しないようなときに備えてパスワードは必ず必要。だから残る。実際、生体認証もバック（設計）でコードを作っている。

パスワードのセキュリティを高めるには管理アプリを使うより、少しでも長い、複雑なパスワードを作り、それをサービスごとに少しずつ変える、たとえば、末尾ふたけたをサービスごとに変えるようにすることが忘れにくくなる方法。自分が考えたルールだから忘れても思い出しやすい。

パスワードを定期的に変えるのは意味がない、また、記号を入れたり、大文字、小文字を混ぜるのも意味がないといわれている。なぜならば、本気でアタックしようと思えば、防御にならないから。それよりも、少しでも長い、複雑なパスワードだと解読に時間がかかり、あきらめるだろうから。

個人の日記を外に出す理由

SNSに載せるのは、日記ではなく人に見せる用の日記。ネガティブの内容をSNSに載せるときには、人に見せたい、見てもらいたいという動機が働いている。

また、ネットの匿名性を信用して無意識に（無邪気に）載せることがある。ネット、SNSはその人の姿がもろばれになるもの。普段はおとなしいのに、ネットの中になったら怒りんぼになったり、自慢家になったりする人がいるが、そっちが本物。SNSはその人の本性がばれるもの。

ひとりで車を運転しているときに本性が現れる。誰に対する気遣いもなく、自分の心そのまま出てくる。この状態がSNSに書き込むときの状態に近い。

みんなが見るところなのに、いろいろな人と相談しながら書くことはなく、ひとりきりでぶつぶつ書き込んでいる。このときの心理状態は、相当気を付けないと、ひとりドライブの脳みそになってしまう。だからばれるようなことを書く。

なぜこんなことを書くのかと疑問を持つものの中には、気づかずに自分の本質を見せているケースもあるのではないかな。

誹謗中傷に対する責任追及の仕方

攻撃に対して楽に追及する方法は犯罪被害にはない。

法律を含め、誹謗中傷がどういうものか、また、弁護士等が苦勞していろいろなことをやり、責任追及していることをまずみんなが知ることが早道。

具体的には、どういうケースが誹謗中傷になり、警察に捕まって名前が世間に出る、どういう場合には民事でこういった責任を負わせられる可能性があるということをどんどん伝えていく必要がある。かつ、民事にも刑事にもならないうちに人が死んでいることを知るのが重要。これで人が死ぬんだよということをネット記事で書くようにしている。

とにかく、世の中が誹謗中傷を理解したうえで、「本当にあなたそれをやるんですか」というのを伝えていかないといつまでたってもネットの誹謗中傷はなくなるらない。

ネットは、現実の辛さを知らない子どもたちに、道具として現実の辛さを知らせている。子どもたちはまだ知らなくてもいい現実の辛さを知らせる道具を知らないうちに使っている。本当だったら世の中の現実とか、いやになるような事実は大人になってから知ればいいのにというものを子どもが直面して辛い思いをしている。なぜならば、ネットは子どもを子ども扱いしてくれないので、誹謗中傷のような大人と同じ辛い目にあわせてしまう。

私は、ネットの誹謗中傷にあった子どもから相談があると次のようなことをいっている。

世の中にはちゃんとした人としてない人がいて、ちゃんとした人がしてない人の分まで背負っている。あなたは、誹謗中傷する、ちゃんとしてない側ではなく、される側。ちゃんとしてるんだよ、親がちゃんと育てたから誹謗中傷する側に立っていない。

ちゃんとしている人が世の中を回していることは、あなたの年では知る必要はないが、残念ながらネットの中ではそうではない。あなたはちゃんとした子に育ったのだからこれからもちゃんとした人になってもらいたい。

ただ、誹謗中傷は辛いので、背負う必要はない。ケアを受ける権利があるからこれこれこういうふうにして下さいというようにしている。

ネットの誹謗中傷の事例をみていると、ひまで自分をもっとやれるのにといい鬱々とした感情を持っていることが誹謗中傷の動機につながっている。ほとんどの人はその誹謗中傷に同意していないというロジカルな事実を伝えつつ、誹謗中傷は1通でも辛いからケアを受けることと責任追及を両軸でやっていかなければならない。

以上

警察政策学会資料 第131号

事例に学ぶ情報リテラシー

令和5(2023)年8月

編集 警察政策学会
管理運用研究部会

発行 警察政策学会

〒102-0093
東京都千代田区平河町1-5-5 後藤ビル2階
電話 (03) 3230-2918・(03-3230-7520)
FAX (03) 3230-7007